

英訳聖書における city, town, village

笠井 勝子

§ 1. Wycliffe による最初の完訳聖書 (1382 年) 以来, 欽定訳聖書 (1611 年) から the New English Bible (新約 1961 年), そして the Jerusalem Bible (1966 年) まで聖書の英訳はよく知られているものだけでも 14, 5 冊を数えることができる。この約 600 年の間に英語自体大きく変化をした。それは聖書の英訳にもみられる (1525 年の Tyndale 訳と 1966 年の訳とを比較すれば, 綴字の安定, 語順の確定, 動詞の -eth 語尾, thou, thy, thee の使い方の変化その他)。聖書は宗教に関連した, したがってきわめて保守性の強い書きことば (書記言語の方が話しことばよりも改まった形をとる) であることを考慮に入れても, 英訳聖書の中に言語の変化をみとめることができる。一方, 聖書のことばが一般の英語に与えた影響も見逃すことはできない。聖書にはじまるいいまわしが, やがて英語の中で慣用表現となった例も少なくない (clear as crystal, the still small voice, the root of all evils, ヘブライ語の属格最上級の模倣 the king of kings, the holy of holies その他)。

およそ 600 年の間にいろいろな訳が出ているということは, 専門的な宗教上の解釈の問題も無論あったであろうが, 一つにはその間の言語の変化に合わせようとする意図がそこに働いていたと考えてよい。そこで英訳聖書は, 一つの原典を——厳密には, それぞれ拠所としたヘブル語, ギリシア語, ラテン語訳や範とした英訳すら異なっているわけであるが, 大まかに聖書の訳としての共通点に立てばこのような言い方もさしつかえないであろう——訳すことばの移り変わりというものについて調べるには貴重な

資料でもあるわけである。たえず変化した部分、あるいはそのまま今日まで受継がれた部分とその一々について調べれば、おもしろい結果が得られるかもしれない。ここでは、city, town, village が英訳の歴史の中でどのような扱いを受けているかを調べてみたい。

§ 2. *Octapla* をふくめて次の 10 冊の英訳聖書を資料としてたどってみると、古い訳に多かった city が新しい訳になるに従って少なくなっているのがまず目につく。

	略称
Tyndale (1525) 1535	
Great Bible (1539) 1540	Great
Geneva Bible (1560) 1562	Geneva
Bishops' Bible (1568) 1602	Bishops'
Rheims 1582	
King James (1611) 1873	KJ
(RV 1881) American Standard Version 1901	ASV
Revised Standard Version (1946) 1960	RSV
New English Bible (1961)	NEB
Jerusalem Bible 1966	Jerusalem

(括弧内は初版の年。Rheims と Jerusalem はカトリック系の訳である。RV はイギリスで行なわれた KJ の改訳、ASV はそれに協力したアメリカ側の委員による修正訳である。RSV はアメリカの、NEB はイギリスの訳、Jerusalem はエルサレムのドミニコ聖書学校でフランス語訳された *La Bible de Jérusalem* のイギリス版である。)

それは、時代の流れの中で昔 city という語で cover された事象が今ではその網の目からとりこぼされているということである。その場合、city

の網の目が時流の中で広がって大きくなったからなのか、あるいは事象そのものが時の流れからとり残されて小さくなったかのいずれかが考えられる。

NED で city の意味それぞれについて記録に残っている古い年代をみると、どの意味もだいたい 1500 年頃までには出そろっており^①、それ以後今日までその意味で続いてきている^②。ということは city の網の目自体にそう大した変化はなかったものと考えられる。一方事象そのものは、たとえばこの 400 年余(1525 年の Tyndale 訳から 1966 年の Jerusalem 訳まで)の間、いいかえれば、中世への反発でやっきとなっている時代と 20 世紀後半の今日とでは比較にならないものがある。

§ 3. City town, village のうち二つを接続詞等で並べていう場合、古い訳では例えば city and town であるが、新しい訳では town and village となっている。その間の橋わたしを city and village がつとめている。これはおおまかないい方をすれば、一つの訳でもその箇所によって入れ替わりをした所ともとのままの所とがあるけれども、city を town に town を village にかえてきているのである。そして、その順序は必ず town であったところが village に、ついで city であったところが town に変わるのであって、その逆ではない。このことは例えば city and village の結合が town and village より古い訳にしかないことでわかる。該当の箇所を表にして示すと、

マタイ 9 章 25 節は Tyndale, Great, Geneva, Rheims が cities and townes に, Bishops', KJ, ASV, RSV が cities and villages に, そして 20 世紀の訳は共に townes and villages になっている。この表に限らず Rheims 訳で逆戻りをしていると思われる点については、この訳がイギリスのカトリック教徒のために大陸で英訳された(当時エリザベス 1 世は国教会の長となり、1570 年に教皇から破門されていた)という事情が考慮されなけれ

表 1 Matthew 9 : 25

	cities and towns	cities and villages	towns and villages
Tyndale	○		
Great	○		
Geneva	○		
Bishops'		○	
Rheims	○		
KJ		○	
ASV		○	
RSV		○	
NEB			○
Jerusalem			○

表 2 Matthew 10 : 11

	city or town	city or village	town or village
Tyndale	○		
Great	○		
Geneva	○		
Bishops'	○		
Rheims	○		
KJ	○		
ASV		○	
RSV			○
NEB			○
Jerusalem			○

ばならないだろう。

表の 1 と 2 とを比べてみると、同じ訳書でも、Bishops', K.J. の場合のように 9 章 25 節では cities and villages になっているのに、10 章 11 節では city or town であったり、同じところが RSV ではそれぞれ cities and villages と town or village になっているというように、ある箇所は古いままに、また別の箇所では新しい形に訳されている。これは、その箇所の意味内容と特に関係が あつてのことというよりも、——Tyndale, Great,

表 3 Luke 13 : 22

	cities and (or) towns	cities and villages	towns and (or) villages
Tyndale	○(○)		
Great	○(○)		
Geneva	○(○)		
Bishops'	(○)		
Rheims	○(○)		
KJ	(○)	○	
ASV		○	
RSV			○(○)
NEB			○(○)
Jerusalem			○(○)

※ or による結合は () で示す (以下同じ)

表 4 Mat 23 : 34

	from city to city	from town to town
Tyndale	○	
Great	○	
Geneva	○	
Bishops'	○	
Rheims	○	
KJ	○	
ASV	○	
RSV		○
NEB	○	
Jerusalem		○

Geneva 訳では共に cities and towns, city or town である——後に出てくる資料でも見られることであるが、翻訳が統一を欠き、あるいは画一的になるのをさげようとする無意識の操作であったといえる。また、古い訳では city or town を、新しい訳では town or village を選んだのに比べて、その間の時代は過渡的な自由さがあったともいえる。

ルカの 13 章 22 節には and と or による二組——cities and towns と

cities or towns—がある（ただし Bishops' や ASV のように一方だけしか用いていない訳もある）。この表では or には中間の cities・villages の結合がないけれどもこれは偶然のことであろう。

マタイの 23 章 34 節は同じ語を重ねたいい方であるが、ここで特に注意しておきたいのは ASV が古い形 city に留まっている点である。それは新訳聖書全体を通して ASV がきわめて慎重に town を使うのを避けていることによるものである。Acts 19:35 に the townclerk という語があるけれども、この場合は一語に綴られる全く別の語“書記役”の一部になってしまっている（ここは Rheims 訳では the Scribe と訳されている）。したがって ASV には town はないといってよい。当時の辞書を調べると、Webster (1828) には、town に次のような意味が出ている。

TOWN, 5. In popular usage in America, a township; the whole territory within certain limits.

この popular usage が聖書にはあてはまらないために ASV ではこの語が退けられたのであろう（city, village については注^⑥を参照されたい）。

§ 4. まず town が village にかわり、次に city が town になる、ということを実に述べた。そのことについて city, town, village 各々別個の例にあたってもう少し具体的に調べてみるとはっきりするにちがいない。

Cruden のコンコードダンス（欽定訳）によって、新約聖書の中の city, town, village を拾い出し、他の九つの訳の同じ箇所を照合してみると、§ 3 で述べたことと全く同じ結果になる。すなわち、かなり整然と古い訳書では town のところが新しい訳では village になっていること、また古い訳で city のところが新しい訳では town になっていること、さらにこの二つの推移は town→village の推移が完了してから city→town がはじまっていることである。

表 5 をみれば、それまで town であった箇所が ASV ではみな village

と訳されていることがわかる。また表6では ASV まで city であった箇所
の訳語が RSV になってはじめて大きく乱れていることがわかる。

この二つの表は、訳語に推移のあった場合についてであるから Tyndale
から Jerusalem まで一貫して同じ語で通っているものについては別に述べ
なければならない。

表 5

	town	village
Tyndale	17	
Great	17	
Geneva	17	
Bishops'	8	9
Rheims	17	
KJ	8	9
ASV		17
RSV		17
NEB		17
Jerusalem		16

表 6

	city	town
Tyndale	51	1
Great	51	1
Geneva	52	
Bishops'	50	2
Rheims	52	
KJ	52	
ASV	52	
RSV	39	13
NEB	13	39
Jerusalem	1	51

§ 5. Tyndale から Jerusalem までつねに同じ訳語で通ってきたのは
city の一部だけであった。具体的にはこのような city は何らかの修飾語
を伴う場合の方が単独で特定の都市をさしている場合よりずっと多い。そ
れを次にみてみよう。同じ項目の下には頻度の多い順に配列をした。

修飾語を伴う場合

A. 形容詞

the holy city[®]: エルサレムをさしている。

the great city

次に地名を伴う場合

the great[®] city Jerusalem

the great city Sodom and Egypt

the great city Babylon

次に地名を伴わない場合

the mighty[®] city : バビロンのこと。

the principal city

the beloved city

strange cities

no continuing city

B. of のついた名詞句を伴う場合

the city of that great king : Jerusalem のこと。

the city of living God

the city of my God

the city of Jerusalem

the city of Sodom and Gomor

the cities of all nations[®]

C. その他

a citie whose bylder and maker is God

Tharus a city in Cicill

修飾語を伴わない場合

A. Jerusalem をさしている。

B. Jerusalem 以外の都市をさしている。

ダ ル ソ

ダ マ ス コ

コ リ ント

テ サ ロ ニ ケ

注

- ① 新約聖書は 1380 年、全巻の完成は 1382 年。旧新約聖書のラテン語訳 *Vulgata* を翻訳したもので、英語で最初の完訳聖書。現在なお 170 部残存しているといわれる。
- ② *The New English Bible* 旧新約の全訳は 1970 年。
- ③ City of London の意味では 1556 年、a selfgoverning city or state with its dependencies の意味では 1540-1 が最初の例である。アメリカ (1843)、カナダ (1876) の用例はずっと後になっている。
- ④ 廃用になった例が一つだけある。A town or other inhabited place. Not a native designation, but app. at first a somewhat grandiose title, used instead of the OE. BOROUGH. 聖書に出てくる実際は村でしかないような場所——Nazareth, Nain, Bethlehem 等——に使われた。here, as a literalism of translation, it still stands in Bible versions と出ているが実はそうではなくなってきている。さらに Wycliffe 訳では、はじめ “had regularly town” であったのが、後の Purvey の改訂版では *cities* にしてしまった（エステル記 9:19 と創世記 13:12 以外は）ということである。
- ⑤ Webster (1828) の city と village
- CITY, 1. In a general sense, a large town; a large number of houses and inhabitants, established in one place.
- VILLAGE, A small assemblage of houses, less than a town or city, and inhabited chiefly by farmers and other laboring people. In England, it is said that a *village* is distinguished from a town by the want of a market. In the United States, no such distinction exists, and any small assemblage of houses in the country is called a *village*.
- ⑥ 語頭 h, c を大文字にするかどうかは訳書によってまちまちである。
- ⑦ Revelation 21:10 では ASV 以後の訳および Rheims では the holy city になっている。
- ⑧ Rheims, ASV は strong, Jerusalem は powerful になっている。
- ⑨ NEB と Jerusalem では of the world になっている。

Johnson (1775) には特に注意を引くような意味は見当たらないが——

CITY. 2. In the English law.

A town corporate, that hath a bishop and a cathedral church.

TOWN 3. In England, any number of houses to which belongs a

regular market, and which is not a city or see of a bishop.

VILLAGE. A small collection of houses in the country, less than a town.

Bibliography:

The New Testament Octapla, Eight English Versions of the New Testament in the Tyndale-King James Tradition, ed. by Luther A. Weigle, Thomas Nelson & Sons, New York.

The New English Bible, New Testament, Oxford University Press, Cambridge University Press, 1961.

The Jerusalem Bible with Abridged Introductions and Notes, general editor Alexander Jones, Darton, Longman & Todd, 1968.

Cruden's complete Concordance to the Old & New Testaments by Alexander Cruden, revised ed., Lutterworth Press, London, 1969.

The Cambridge History of the Bible the West from the Reformation to the Present Day, ed. by S.L. Greenslade, Cambridge at the University Press. 1963.

英語の聖書：寺沢芳雄・早乙女忠・船戸英夫・都留信夫 共著。富山房，1969.

An American Dictionary of the English Language: Noah Webster 2 vols, New York Published by S. Converse 1828.

A Dictionary of the English Language: in which the words are deduced from their originals, and Illustrated in their Different Significations. by Samuel Johnson. 2 vols. London, Printed by W. Strahan 1755.

The Oxford English Dictionary

英語史概説：フェルナン・モセ著。郡司利男・岡田尚訳，開文社，1963.